

こちら特報部

おのれ
この道

二〇一一年三月に起きた東京電力福島第一原発事故。節目の十年に先駆けて昨年出版された本がある。フリーライターの吉田千亜(あき)が執筆した「孤塁 双葉郡消防士たちの3・11」だ。作中で描いたのは、事故直後に被災の最前線で奔走した地元消防士だった。例えば三月十二日の夜。「津波で流された」と救助要請を受けた富岡消防署の面々は福島県大熊町に向かった。第一原発の立地町だ。急行した車のライトで浮かび上がったのはキラキラ光る粒子。数時間前、最初の水素爆発が起きていた。「これが、あれか。爆発の灰か」。彼らの頭によぎったのは「死の灰」だったが、それでも捜索を続けた。

以後も第一原発は爆発を繰り返した。原発構内から消防に届く負傷者の搬送依頼。危機的な現場に向かう一人は同僚にこう漏らす。「今まで、ありがと

原発被災地に



フリーライター
消防士描いた「孤塁」で3賞
吉田千亜(43)

ね」。原子炉の冷却作業に駆り出す出動要請も入る。死を意識し、手持ちのメモに遺書をつづった男性もいた。

緊迫感あふれる描写は丹念な聞き取りに裏打ちされていた。インタビュールした消防士は六十六人。同じ人に何度も話を聞くのをいとわず、取材は一年二月月に及んだ。そうして仕上げた一冊は、講談社本田靖春ノンフィクション賞と日隅一雄・情報流通促進賞大賞、

思いをはせ続ける

日本ジャーナリスト会議(JJC)賞に選ばれた。命を賭した人たちの思いをくみ、彼らの活動を伝えた吉田は、幼い頃から物書きの仕事に憧れた。大卒後は出版社に勤めた。ただ任された仕事は宣伝で、結婚を機に三年でやめた。フリーライターになったのは、長男の出産から二年ほどたった〇六年ごろ。女性誌の書評コーナーなどを担当したが、二年后に長女が誕生し、再び子育て中心の生活に戻った。

そんな中で起きたのが「3・11」だった。遠い地の災害ではなく、自らに迫る危機として体感した。

埼玉県内の自宅はテレビが倒れそうになるほど揺れ、二歳の長女を抱えて机の下に身を潜めた。幼稚園まで長男を迎えに行こうと外に出ると、大渋滞ができていた。「異常事態が起きている」。原発の暴走が始まると、埼玉まで影響が及ばないか、被ばくを防ぐにはどうすべきか知るため、夜中までパソコンに向き合った。一時は避難も考えた。

四月になって長男が小学校に入ると、給食で使う食

事故直後から福島の母子ら支える

材が心配になった。吉田は一人で給食センターへ向かい、「産地を教えてほしい」と訴えた。しかし、返ってきたのは「気にしすぎですよ」という言葉。納得できない吉田は給食の献立表を見て同じメニューの弁当を作り、長男に持たせた。

やがて吉田は福島で暮らす人たちにも思いをはせるようになる。

七月に放射能を心配する母親たちの全国団体ができて吉田も運営に関わり、検査済みの食材を福島に送る事業を企画した。「私は埼玉にいても子どもの体が心配だった。福島のお母さんたちもそう感じているはずだと思った」

翌年の春から、埼玉県内に避難してきた母親らを対象に交流会を始めた。同じ境遇の人同士が悩みを分かち合う場をつくりたかった。地元市を通じて案内状を送り、月一回ペースで開いた。初回に来たのは二人。次は四人。それが十人、三十人と増えていった。「こういうのをね、待ってたんです」。参加者の感謝の言葉に、涙がこみ上がった。

二エースの追跡

る(と)などを求めた。さうで、学校を休校したり、修に、同月に富山県で開催の学旅行などのイベントを中

万三千九百三十件。前年度から二割以上増え、過去最

と一緒になって、政府や自治体に制定を訴えたい」



興和株式会社

その腰痛 キュービト

1回1錠、腰の内側に
まずは患部同時に患部疲労などか血流を促進
悩んできた



トリ

こちら特報部

会を重ねるにつれ、複雑な状況に置かれる人たちがいることも分かった。避難区域外の地域から避難した「自主避難者」たちだ。

交流会に来た女性は「避難者じゃないですけど…」と切り出した。どこか後ろめたさを感じているようだった。別の女性は手の震えが止まらなかった。周囲の目を強く気にし、心に負荷がかかっているように見えた。避難の孤独と不安からアルコールに頼ってしまった母親とも知り合った。

「私も避難を考えただけど、実際に避難した人の苦労は想像を超えていた」

自主避難者は避難区域から逃れた人と違い、月十万円程度の賠償が出なかった。住宅の無償提供も一五年六月に打ち切りが決まった。政府が翌月に開いた説明会では支援拡充を求める声が続出したが、役人の一人は「お時間です」と書いたボードを掲げて発言を遮った。

そんなころ、自主避難する母親らを題材に本を書いてほしいという依頼が吉田に舞い込んだ。事故前から書く仕事をしていたが、一冊まとめるだけの分量を担ったことにはない。それでも吉田は引き受けた。自主避難者たちが人知れず苦悩してきたことを伝え、支援が乏しいままでいいのか世に

被ばく対応への疑念 執筆の根底に

「政府は被害を矮小化」



問いたかったからだ。吉田は毎晩、子どもが寝付いた後にファミリーストランで原稿を書いた。三カ月にわたってこの生活を続け、自身初の著書「ルポ 母子避難 消されゆく原発事故被害者」をまとめ、一六年に刊行した。二年後には「その後の福島 原発事故後を生きる人々」も出版。復興五輪が喧伝される中で強行された避難指示解除や「放射能の問題は心配しなくていい」とすり込む政府のリスクコミュニケーションなどを扱った。

冒頭で触れた「孤塁」は三冊目に当たる。命を賭した消防士の活動にスポットを当てたが、そもそも彼らの聞き取りを始めたのは、事故がもたらした被害を詳しくつかむためだった。自主避難者への乏しい支援などを見るに付け、「政府は事故の被害者から目をそらしてきた」「被害を矮小化している」と考えてきた。その憤りが吉田を執筆に駆り立ててきた。そんな中でも強く疑問を抱いていたのが事故直後の住民の被ばくを巡る対応だった。政府は焦点となる甲状腺内部被ばくについて「問題ない程度」と流布してきたが、測ったのは千八十人と少なく、楽観論をうのみにできなかつた。

事故直後の放射能汚染や避難の状況を知るために話を聞いたのが、地元消防士たちだった。避難誘導も担った彼らなら情報を持っているのではと考えた。取材を進める中で分かったのが消防士たちの苦悩だ。特攻隊のような仕事を強いられたことは「被害」の一つだと感じた。それなのに、彼らの活動はほとんど伝えられてこなかった。吉田は消防士の証言を書き残したいと考えた。その一方で一連の取材を通じ、原発近くから逃げ遅れた住民が少なからずいたこと、避難区域外でも汚染の測定器が高値を示したことも分かったため、重要な背景として作中に書き込んだ。

「孤塁」の出版後、吉田は改めて事故後の被災状況を聞き取っている。「どんな被害があったか記録しておかないと、被害がなかったことにされかねない。実際とかげ離れた歴史が残るのは嫌なんです」

深刻な被ばくに見舞われた人は本当にいないのか。自主避難者や消防士のように人知れず苦悩していた人たちはいないのか。「いた」といつなら書き残し、手厚い支援につなげたい。二度と同じ被害が生じないようにしたい。世間の関心は新型コロナウィルス禍に向いているが、吉田はこの先も原発事故の被災者に思いをはせる。(榊原崇仁、敬称略) 〓おわり

被災記録 今も「なかったことにされるのは嫌」

テキスト

災害被害は、とかく目に見えるものが取り上げられる。表に出ない被害や公に語られない被害は、なかったことにされる。心身や生活に打撃を受けたのに「被災者」として扱われないこともある。被災者たちの小さな声を聞き逃さずに伝える吉田さんの思いが、社会に広がってほしい。(佳)

民が少なからずいたこと、避難区域外でも汚染の測定器が高値を示したことも分かったため、重要な背景として作中に書き込んだ。

「孤塁」の出版後、吉田は改めて事故後の被災状況を聞き取っている。「どんな被害があったか記録しておかないと、被害がなかったことにされかねない。実際とかげ離れた歴史が残るのは嫌なんです」

深刻な被ばくに見舞われた人は本当にいないのか。自主避難者や消防士のように人知れず苦悩していた人たちはいないのか。「いた」といつなら書き残し、手厚い支援につなげたい。二度と同じ被害が生じないようにしたい。世間の関心は新型コロナウィルス禍に向いているが、吉田はこの先も原発事故の被災者に思いをはせる。(榊原崇仁、敬称略) 〓おわり

話題の発掘

として寄付されます。

再活用

弊社の買い取りシステムでは
トラブル・クレーム等の発生がありません。
(査定の結果を聞かれた上で、お客様自身が決められる方法ですので、ご安心下さい)

STEP1	STEP2	STEP3	STEP4
お問い合わせを頂きますと、基準の金額をご案内いたします。お申込み頂きましたら、お近くを通る車の予定を事前にご案内(ご相談)差し上げます。	弊社の専門スタッフがご伺いし査定の内容と結果をご案内いたします(地域ごとにお伺いします。出張費がかかります。査定から査定までの費用は無料)。	ご案内させて頂きました査定金額より、ご売却をお考えになりましたら、ご売却をお勧めします。この方法ですと無理がありませんので安全・安心です。	当日、お引取りのご依頼を頂きました場合は、その場でご精算の上で、お引上げすることもできます。(一部地域を除く)運送費等はかかりません。

【機種・製造番号の調べ方】
機種・製造番号は天井のフタを開けて、金色のフレーム右側または中央に印字されています。

